

入選 モンゴル国 中西 令子 様 (70代)

2025年3月、私のモンゴル住まいは30年になった。私は、民主化間もない1995年に日本語講師としてモンゴルにやってきた。組織からの派遣ではなく、知り合いを通しての就職である。そのため、私の給料はモンゴル人の教師たちと同じ扱いだった。

中学校の教師のひと月の給料は、日本円に換算すると、3千円ぐらいであった。その分日本と比べて物価は安いかというと、民主化直後のモンゴルは、インフレが人々の暮らしを襲っていた。日常には欠かせないパンが、ある日40パーセントも値上がりした。

2、3年経っても給料は思うように上がらず、私はあるとき経理の人にこう言った。

「私は、仕事を辞めたらモンゴルには住めません。ビザが取れないのです。外国人は年金ももらえないということです。ですから、給料から社会保険料を引かないでもらえますか」
ところが経理の人はこう答えた。

「誰でも社会保険料を払うのは、この国に住んでいる人たちの義務です。法律で決められているので、あなたの保険料だけ引かないということはできません」

引かれる金額は、給料の2.5パーセントほどであったが、痛手でもあったのだ。モンゴルの年金制度では法律とはいえ、外国人は受給対象外という理不尽さが腹立たしかった。

20数年後、新しく赴任してきた教頭先生が、私にこう言った。

「あなたはモンゴルで働いてもう30年。社会保険料は払ってきているでしょ？申請しましょう。年金がもらえるはずですから」

私は、首を振った。

「いやいや、外国人はもらえないそうですから」

「とにかく社会保険事務所に行ってみましょう」

期待はしなかったが、何度も足を運んだ結果、最低額だが、私はモンゴルで年金受給者となった。いつからか制度が変わったらしい。

長年、経済的不安定な暮らしの中で、病気で倒れないため必死に自分を支えてきた。目には見えないその支えが、ふと必要なくなった。低額とはいえ、今後、定期的な収入があることで、もう辛い支えを捨てることができるのだ。

そんな経験談を在留邦人で、ビジネスをしている人にした。その人はこう言った。

「中西さんは日本で何年働いていたの？」

聞かれて改めて数えてみると10年あるかどうかだ。自分は、年金受給資格に該当しないと思
い込んでいたため、ほとんど考えてみたことがなかった。

「今、日本では10年、年金を払っていたら受給できるって知ってる？」

昔、若さに甘えて、好き勝手にアルバイトや個人事業のところで働いていたこともあった。
だから、年金受給の事は考えなかった。

モンゴル在留30年目に入ろうとしていた頃、私は休みを利用して帰国した。熊本に親戚づ
きあいの家族がいるのである。買い物をしていてふと思い出した。年金の件、聞くだけ聞い
てみようかと。滞在していた家の人に軽い気持ちで言った。

「私、日本での年金がもらえるかどうか調べてみたいんだけど」

そう言うと、

「そうだね、年金事務所に行って調べてもらおうか」

それは、熊本を離れる前々日の午後のことだった。ダメ元で、一番近い年金事務所に行っ
た。職場はもう就業時間終了の数分前であった。受付で事情を話すと時間外になったにも関
わらず、職員の女性が懇切丁寧に対応してくれた。パスポートを掲示し、出生地、本籍、両親
の名前を言う。

ここで私は、思いがけない事実を知ることになる。私の年金支払い年数は、やはり10年未
満であった。ところが、母が私の分を払ってくれていた時期があり、それを足すと、私には
受給資格が認められるのであった。そして、6年間の未受給分も受け取ることができるらし
い。

「わあ、何てこと！良かったねえ」

私本人よりも、連れて行ってくれた知り合いの方が感動して喜んだ。

「レイちゃん、お母さんに感謝しなきゃね。こんなことがあるなんて」

知り合いの人は興奮して何度も言うのだった。

生活と仕事に追い詰められるモンゴルでの30年の日々は、ようやく一区切りつくのか。こ
れで、お金の苦労は終わるのだろうか。楽になるという実感はまだなかった。しかし、午後

の短い時間の中で、人生が少し変わる気配を覚えた。

30年前、私がモンゴルに旅立つ日、空港で母はこう言った。

「モンゴルの人たちと同じレベルの生活をしなさい」

それは贅沢をするなと言う戒めであった。

あるとき、日本の母に金銭の援助を頼んだことがある。しかし断られた。

「自分の力で生きなさい」

と短い手紙がきた。母の厳しい言葉に自分が投げ出されたような気がした。

そして30年後の今、わかった。投げ出されたどころか、私はこれからの生活を母に救われたのだ。モンゴルや、日本での年金がなければ、いったいどうやって生きていくというのか。路頭に迷う生活が来たかもしれない。考えれば怖くて、近い未来を真剣に考えることから逃げていた。

私は母に何もしてあげられなかった。その母に感謝する思いは、私を見守っている熊本の冬空を仰ぐことだけだった。